

**令和3年度実施
選択的評価事項に係る評価
評価報告書**

大分工業高等専門学校

令和4年3月

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構

目 次

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構が実施した選択的評価事項に係る評価について……………	i
I 選択的評価事項に係る評価結果……………	1
II 選択的評価事項ごとの評価……………	2
選択的評価事項A 研究活動の状況……………	2
選択的評価事項B 地域貢献活動等の状況……………	4
<参 考>……………	5
i 現況及び特徴（対象高等専門学校から提出された自己評価書から転載）……………	6
ii 目的（対象高等専門学校から提出された自己評価書から転載）……………	7

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構が実施した選択的評価事項に係る評価について
--

1 評価の目的

独立行政法人大学改革支援・学位授与機構（以下「機構」という。）の実施する認証評価は、高等専門学校
の正規課程における教育活動を中心として高等専門学校の教育研究活動等の総合的な状況を評価
するものですが、高等専門学校にとって研究活動は、教育活動とともに主要な活動の一つであり、さら
に高等専門学校は、社会の一員として、地域社会、産業界と連携・交流を図るなど、教育、研究の両面
にわたって知的資産を社会に還元することが求められており、実際にそのような活動が広く行われてい
ます。

そこで機構では、「評価結果を高等専門学校にフィードバックすることにより、高等専門学校の教育
研究活動等の改善・向上に役立てること」、「高等専門学校の教育研究活動等の状況を社会に示すこと
により、広く国民の理解と支持が得られるよう支援・促進していくこと」という評価の目的に鑑み、各高
等専門学校の個性の伸長に資するよう、高等専門学校評価基準とは別に、高等専門学校の多様な活動状
況を評価するため、「研究活動の状況」（選択的評価事項A）と「地域貢献活動等の状況」（選択的評価事
項B）の二つの選択的評価事項を設定し、高等専門学校の求めに応じて、これらの事項に関わる活動状
況について評価を実施しました。

2 評価のスケジュール

機構は、国・公・私立高等専門学校の関係者に対し、高等専門学校機関別認証評価の仕組み、評価方
法等についての説明会、自己評価書の作成方法等について研修を実施した上で、高等専門学校からの申
請を受け付け、自己評価書の提出を受けた後、評価を開始しました。

自己評価書提出後の評価は、次のとおり実施しました。

※ 令和3年度においては、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、教育現場の視察及び学習
環境の状況調査を含めオンラインで実地調査を実施することとし、高等専門学校機関別認証評価委員会
において、通常実施している実地調査と同等の調査であることを確認しました。

3年7月	書面調査の実施
8月	評価部会（注1）の開催（書面調査による分析結果の整理、訪問調査での確認事項の 決定）
9月	運営小委員会（注2）の開催（各評価部会間の横断的な事項の調整）
10月	オンラインによる訪問調査の実施（書面調査では確認できなかった事項等を中心に 対象高等専門学校の状況を調査）
12月	評価部会の開催（評価結果（原案）の作成）
4年1月	評価委員会（注3）の開催（評価結果（案）の取りまとめ） 評価結果（案）を対象高等専門学校に通知
3月	評価委員会の開催（評価結果の確定）

（注1）評価部会・・・高等専門学校機関別認証評価委員会評価部会

（注2）運営小委員会・・・高等専門学校機関別認証評価委員会運営小委員会

（注3）評価委員会・・・高等専門学校機関別認証評価委員会

3 高等専門学校機関別認証評価委員会委員及び専門委員（令和4年3月現在）

(1) 高等専門学校機関別認証評価委員会

阿部 徹	岩手県立前沢明峰支援学校教諭／元 盛岡工業高等学校長
荒井 幸代	千葉大学教授
荒金 善裕	元 東京都立産業技術高等専門学校長
有信 睦弘	広島県立叡啓大学長
大島 まり	東京大学教授
萱島 信子	JICA 緒方貞子平和開発研究所顧問
○京谷 美代子	元 株式会社FUJITSU ユニバーシティエグゼクティブプランナ
黒田 孝春	長岡技術科学大学特任教授
田中 英一	名古屋大学名誉教授
永澤 茂	長岡技術科学大学教授
新田 保次	元 鈴鹿工業高等専門学校長
飛原 英治	大学改革支援・学位授与機構特任教授
福富 洋志	放送大学特任教授・神奈川学習センター所長／横浜国立大学名誉教授
◎武藤 睦治	長岡技術科学大学名誉教授
村田 圭治	近畿大学工業高等専門学校長
森野 数博	前 呉工業高等専門学校長
山口 周	大学改革支援・学位授与機構特任教授
山本 進一	豊橋技術科学大学理事・副学長
和田 安弘	長岡技術科学大学理事・副学長

※ ◎は委員長、○は副委員長

(2) 高等専門学校機関別認証評価委員会運営小委員会

荒井 幸代	千葉大学教授
田中 英一	名古屋大学名誉教授
◎飛原 英治	大学改革支援・学位授与機構特任教授
福富 洋志	放送大学特任教授・神奈川学習センター所長／横浜国立大学名誉教授
○森野 数博	前 呉工業高等専門学校長

※ ◎は主査、○は副主査

(3) 高等専門学校機関別認証評価委員会評価部会

(第1部会)

青 山 晶 子	富山高等専門学校教授
佐 藤 一 志	仙台高等専門学校教授
◎田 中 英 一	名古屋大学名誉教授
中 井 優 一	明石工業高等専門学校教授
中 野 正 勝	東京都立産業技術高等専門学校教授
榆 井 雅 巳	長野工業高等専門学校教授
飛 原 英 治	大学改革支援・学位授与機構特任教授
○福 富 洋 志	放送大学特任教授・神奈川学習センター所長／横浜国立大学名誉教授
南 将 人	八戸工業高等専門学校教授
向 谷 光 彦	香川高等専門学校教授
米 田 知 晃	福井工業高等専門学校教授

※ ◎は部会長、○は副部会長

(第2部会)

朝 倉 和	広島商船高等専門学校教授
○荒 井 幸 代	千葉大学教授
伊 東 昌 章	沖縄工業高等専門学校教授
大 庭 勝 久	沼津工業高等専門学校教授
岡 本 修	茨城工業高等専門学校教授
長 岡 史 郎	香川高等専門学校教授
中 村 格	鹿児島工業高等専門学校教授
飛 原 英 治	大学改革支援・学位授与機構特任教授
◎森 野 数 博	前 呉工業高等専門学校長
湯 治 準一郎	熊本高等専門学校教授
米 光 裕	和歌山工業高等専門学校教授

※ ◎は部会長、○は副部会長

4 本評価報告書の内容

(1) 「Ⅰ 選択的評価事項に係る評価結果」

「Ⅰ 選択的評価事項に係る評価結果」では、選択的評価事項A及び選択的評価事項Bについて、対象高等専門学校（以下「対象校」という。）が自ら定めた各評価事項に関する目的の達成状況について記述しています。

また、その目的に照らして、「優れた点」、「改善を要する点」がある場合には、それらの中から主なものを抽出し、上記結果と併せて記述しています。

(2) 「Ⅱ 選択的評価事項ごとの評価」

「Ⅱ 選択的評価事項ごとの評価」では、対象校が自ら定めた各評価事項に関する目的の達成状況等を以下の4段階で示す「評価結果」及び、その「評価結果の根拠・理由」を記述しています。加えて、取組が優れていると判断される場合や、改善の必要が認められる場合には、それらを「優れた点」及び「改善を要する点」として記述しています。

<選択的評価事項の評価結果を示す記述>

- ・ 目的の達成状況が非常に優れている。
- ・ 目的の達成状況が良好である。
- ・ 目的の達成状況がおおむね良好である。
- ・ 目的の達成状況が不十分である。

(※ 評価結果の確定前に対象校に通知した評価結果（案）の内容等に対し、意見の申立てがあった場合には、「Ⅲ 意見の申立て及びその対応」として、当該申立ての内容を転載するとともに、その対応を記述することとしています。)

(3) 「参考」

「参考」では、対象校から提出された自己評価書に記載されている「i 現況及び特徴」、「ii 目的」を転載しています。

5 本評価報告書の公表

本報告書は、対象校及びその設置者に提供します。また、対象校全ての評価結果を取りまとめ、「令和3年度選択的評価事項に係る評価実施結果報告」として、ウェブサイト (<https://www.niad.ac.jp/>) への掲載等により、広く社会に公表します。

その際、自己評価書（根拠として提出された資料・データ等を含む。）も併せて公表し、その書面調査で確認できなかったものの、訪問調査において確認ができた内容については、本評価報告書の該当箇所後ろにアスタリスク*を付しています（一文の全体の場合は句点の後ろ）。

I 選択的評価事項に係る評価結果

大分工業高等専門学校は、大学改革支援・学位授与機構が定める「選択的評価事項A 研究活動の状況」において、目的の達成状況が良好である。

当該選択的評価事項Aにおける主な優れた点として、次のことが挙げられる。

- 地域共創テクノセンターを中心とした研究活動推進体制のもと、農工連携や、高専発！「Society5.0 型未来技術人財」育成事業の GEAR5.0（未来技術の社会実装教育の高度化）において、学内外と連携した研究グループの形成や複数教員での共同研究や外部資金獲得が行われている。

大分工業高等専門学校は、大学改革支援・学位授与機構が定める「選択的評価事項B 地域貢献活動等の状況」において、目的の達成状況がおおむね良好である。

II 選択的評価事項ごとの評価

選択的評価事項A 研究活動の状況
<p>評価の視点</p> <p>A-1 高等専門学校の研究活動の目的等に照らして、必要な研究体制及び支援体制が整備され、機能しており、研究活動の目的に沿った成果が得られていること。</p>
<p>観点</p> <p>A-1-① 研究活動に関する目的、基本方針、目標等が適切に定められているか。</p> <p>A-1-② 研究活動の目的等に照らして、研究体制及び支援体制が適切に整備され、機能しているか。</p> <p>A-1-③ 研究活動の目的等に沿った成果が得られているか。</p> <p>A-1-④ 研究活動等の実施状況や問題点を把握し、改善を図っていくための体制が整備され、機能しているか。</p>

【評価結果】

目的の達成状況が良好である。

(評価結果の根拠・理由)

評価の視点A-1

研究活動に関する目的、基本方針、目標等として、「大分工業高等専門学校における研究活動の目的及び基本方針に関する基本事項」を定めている。

学校が設定した研究活動の目的等を達成するため、研究活動の実施体制として、校長補佐（研究担当）及び校長補佐（連携担当）の配置、地域共創テクノセンター、技術部、設備等を含む研究体制として地域共創テクノセンター、総合情報センター、支援体制として研究推進室、事務部、技術部を整備している。これらの体制の下、研究活動を支援するため、企業と教員との技術マッチング、産学官連携研究のコーディネート、全国KOSEN多孔体・多孔質体研究ネットワークへの参加等を実施している。

学校が設定した研究活動の目的等に照らして、平成28年度から令和2年度の外部資金の受入実績は、5年間の合計で、科学研究費助成事業（以下「科研費」という。）89,107千円*、受託研究104,348千円、共同研究43,771千円、寄附金90,405千円、各種研究助成金等51,913千円となっている。また、平成28年度から令和2年度における教員の研究発表状況は、5年間の合計で、著書28件、査読付き論文（国際会議含む）261件、無査読論文研究紀要国際会議150件、学協会での研究発表412件、特許17件、学協会等での指導学生の研究発表382件、著作物15件となっており、田上譲治賞奨励賞等、21件を受賞している。

研究活動等について、問題点を把握し、それを改善に結び付けるための体制を「大分工業高等専門学校研究推進室規程」に基づき整備している。*

科研費の採択率向上のために、科研費申請書類の学内査読・高専機構査読の取組を行っている。学内査読の取組の結果、科研費の採択件数は令和2年度の9件から令和3年度の15件に増加している。

農工連携に関する活動として、農作物の生産量向上、農作業の自動化、農機改良等の地域農家のニーズを發展させて外部資金を獲得し、農家や企業等との連携を強固にしている。また、高専発！「Society5.0型未来技術人財」育成事業のGEAR5.0（未来技術の社会実装教育の高度化）において、他の研究機関と協力して先端マテリアル産学官協働研究プロジェクトを遂行し、複数教員による共同研究、論文等発表、地域企業との連携、外部資金獲得を行っている。これらの活動が發展して、水素社会の実現に向けた研究を

遂行するため産学官協働研究室が学内に設置され、令和3年度に採択された文部科学省先端研究基盤共用促進事業（コアファシリティ構築支援プログラム）の実施校に選ばれている。*

これらのことから、高等専門学校の研究活動の目的等に照らして、必要な研究体制及び支援体制が整備され、機能しており、研究活動の目的に沿った成果が得られていると判断する。

以上の内容を総合し、「目的の達成状況が良好である。」と判断する。

【優れた点】

- 地域共創テクノセンターを中心とした研究活動推進体制のもと、農工連携や、高専発！「Society5.0 型未来技術人財」育成事業の GEAR5.0（未来技術の社会実装教育の高度化）において、学内外と連携した研究グループの形成や複数教員での共同研究や外部資金獲得が行われている。*
- 農工連携に関する活動として、農作物の生産量向上、農作業の自動化、農機改良等の地域農家のニーズを発展させて外部資金を獲得し、農家や企業等との連携を強固にしている。*
- 高専発！「Society5.0 型未来技術人財」育成事業の GEAR5.0（未来技術の社会実装教育の高度化）において、他の研究機関と協力して先端マテリアル産学官協働研究プロジェクトを遂行し、複数教員による共同研究、論文等発表、地域企業との連携、外部資金獲得を行っている。これらの活動が発展して、水素社会の実現に向けた研究を遂行するため産学官協働研究室が学内に設置され、令和3年度に採択された文部科学省先端研究基盤共用促進事業（コアファシリティ構築支援プログラム）の実施校に選ばれるなどの成果を上げている。*

選択的評価事項B 地域貢献活動等の状況
<p>評価の視点</p> <p>B-1 高等専門学校の地域貢献活動等に関する目的等に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、活動の成果が認められていること。</p>
<p>観点</p> <p>B-1-① 地域貢献活動等に関する目的、基本方針、目標等が適切に定められているか。</p> <p>B-1-② 地域貢献活動等の目的等に照らして、活動が計画的に実施されているか。</p> <p>B-1-③ 地域貢献活動等の実績や活動参加者等の満足度等から判断して、目的に沿った活動の成果が認められるか。</p> <p>B-1-④ 地域貢献活動等に関する問題点を把握し、改善を図っていくための体制が整備され、機能しているか。</p>

【評価結果】

目的の達成状況がおおむね良好である。

(評価結果の根拠・理由)

評価の視点B-1

地域貢献活動等に関する目的、基本方針、目標等として、「大分工業高等専門学校における地域社会貢献活動の目的及び基本方針に関する基本事項」を定めている。

地域貢献活動等の目的等に照らして、公開講座実施計画書を策定するなど、地域貢献活動等の方針を策定している。*

この方針に基づき、令和元年度は公開講座6件、出前授業「科学と遊ぼう！」3件、公開セミナー3件等を実施している。

地域貢献活動等の実績や活動参加者の満足度等については、令和元年度に実施した公開講座のアンケートにおいて、「とても満足」と回答した者の割合は84.0%、出前授業「科学と遊ぼう！」のアンケートにおいて、「とても満足」と回答した者の割合は93.0%、公開セミナーのアンケートにおいて、「満足している」と回答した者の割合は82.0%となっている。

地域貢献活動等について、問題点を把握し、それを改善に結び付けるための体制を「大分工業高等専門学校地域共創テクノセンター規則」に基づき整備している。

令和元年度の外部評価委員会において指摘のあった、地域貢献活動として従来の「出前授業」、「高専祭」と合わせたESD（持続可能な開発のための教育）の推進役として教育支援機能を発揮するという課題に対し、科学を中心とした様々なイベントを継続し、社会づくりの担い手や人間性を育む取組を子供たちに行うという改善計画を立て、令和2年度には、九州理科教育ネットワーク等のイベントをオンラインで開催したほか、実験講座へ講師を派遣するなどの改善を図っている。

これらのことから、高等専門学校の地域貢献活動等に関する目的等に照らして、地域貢献活動が適切に行われ、活動の成果が認められていると判断する。

以上の内容を総合し、「目的の達成状況がおおむね良好である。」と判断する。

<参 考>

i 現況及び特徴（対象高等専門学校から提出された自己評価書から転載）

1 現況

(1) 高等専門学校名 大分工業高等専門学校

(2) 所在地 大分県大分市大字牧 1666 番地

(3) 学科等の構成

準学士課程： 機械工学科，電気電子工学科，情報工学科，都市・環境工学科

専攻科課程： 機械・環境システム工学専攻，電気電子情報工学専攻

(4) 認証評価以外の第三者評価等の状況

特例適用専攻科（専攻名：機械・環境システム工学専攻，電気電子情報工学専攻）

J A B E E 認定プログラム（専攻名：システムデザイン工学プログラム）

(5) 学生数及び教員数（令和3年5月1日現在）

学生数：875 人

教員数：専任教員 59 人

助手数：0 人

2 特徴

(1) 沿革

大分工業高等専門学校（以下「本校」という。）は、地域産業の振興に寄与する実践的技術者の育成を目的として昭和38年に大分県における最初の理工系高等教育機関として県庁所在地(大分市)に設置され、機械工学科、電気工学科の2学科3学級で開校した。その後、昭和42年度に土木工学科を増設し、平成元年度には機械工学科の1学級を制御情報工学科へと改組し、4専門学科体制となった。さらに、平成13年に電気工学科を電気電子工学科に改称し、土木工学科を平成16年に都市システム工学科に、平成23年に都市・環境工学科に改称した。また、平成24年には、制御情報工学科を情報工学科に改称した。

現在の本校本科は、一般科文系、一般科理系及び4専門学科（機械工学科、電気電子工学科、情報工学科、都市・環境工学科）で構成される。また、準学士課程卒業後も進学意欲を持つ学生の増加に対応し、平成15年には機械・環境システム工学専攻、電気電子情報工学専攻の2専攻からなる専攻科が設置された。

(2) 象徴

校章は、大分県の「大」の字を円形に図案化したものであり、正門近くのモニュメントには哲学者カール・ヒルティの言葉「AMOR OMNIA VINCIT（愛はすべてに打ち勝つ）」が刻まれている。モニュメント自体がシンボルとなり、刻まれた言葉は教育目的や学習・教育目標へと発展した。

(3) 教育課程

準学士課程の低学年（1～3年生）教育は、「基礎力養成プログラム」と称し、高等学校に相当する教育に加え技術者教育への導入に必要な基礎学力養成に力点を置いている。準学士課程の高学年（4～5年生）と専攻科課程の教育はJABEE 認定を受けており「システムデザイン工学プログラム」と称している。このプログラム前半では、教養基礎教育、科学や工学の基礎教育及び技術者としてのセンスを磨く教育に重点を置き、後半の専攻科教育では、専門工学の知識獲得・継続的研究活動と同時に複合的な工学及び科学分野の知識とその運用力をも修得することを主眼とし、技術者倫理やコミュニケーション能力など、技術者

に必要な素養も修得する。

また、平成29年度から、アグリエンジニアリング教育プログラム、平成30年度から、災害レジリエントマインド育成教育プログラムを導入し、専門科目間における横系教育として「農学の素養を持った技術者」及び「レジリエントマインドと基盤的知識を持った技術者」の育成を行うこととしている。

(4) 地域連携

本校は、平成15年に会員企業・団体等とともに大分高専テクノフォーラムを設立し、技術交流を深め地域の産業と文化の発展に寄与しているほか、地域との交流や子供たちに科学技術を紹介し理科離れの防止に寄与するため、出前実験科学講座「科学と遊ぼう」と公開講座等を実施している。これらは、地域共創テクノセンターを中心に、産学官連携、自治体等連携、地域教育連携の3つを柱とした地域連携活動の一環事業となっており、それらの需要の高さから地域に開かれた高専としての役割がますます重要になっている。

大分県、大分市及び国東市と包括連携協定、国土交通省大分河川事務所と連携・協力に関する協定、大分大学と教育研究等交流・協力に関する協定をそれぞれ締結し、地域の発展に寄与するよう、連携を図っている。

また、大分市や農家などからの要請による大葉のハウス栽培時におけるLED照明の導入試験や三つ葉栽培における下葉処理機の改良及び豊後大野市の菊栽培企業、金融機関との共同研究による菊の芽かきロボット製作等、地域の課題に取り組むことにより、地域への貢献を果たしている。

ii 目的（対象高等専門学校から提出された自己評価書から転載）

1. 大分工業高等専門学校の使命

本校では目的を定め、学則の第1章第1条に以下のように掲げている：

第1条 大分工業高等専門学校（以下「本校」という。）は、教育基本法の本質にのっとり、及び学校教育法に基づき、深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成し、心身ともに健康な技術者を養成することを目的とする。

2 本校は、前項の目的を達成するための教育研究等を行い、その成果を社会に広く提供することにより、社会の発展に貢献するものとする。

3 本校の教育目的その他の必要な事項については、別に定める。

また、第3項に基づき、「大分工業高等専門学校の教育目的等に関する規則」を別則として定め、準学士課程、専攻科課程などの目的を明文化している。

2. 教育目的

心身ともに健康な技術者の具体的条件を含め、以下を教育目的としている：

「人間性に溢れ国際感覚を備え、探求心、創造性、表現能力を有する技術者の養成」

3. 育成すべき人材像

教育目的の下、準学士課程及び専攻科課程の育成すべき人材像は以下の通りである：

準学士課程（1～3年生：志学 + 4、5年生：修学）

- (1) 5年間の一貫教育により、深い専門の学芸と、豊かな教養及び高度な専門技術を身につけた技術者
- (2) 対象の本質を理解し分析する能力と、モデル化し総合する能力を備え、チームにあっては協調し互いに高め合うことのできる、専門基礎技術力と教養基礎力に裏打ちされた実践的技術者

専攻科課程（専学）

- (1) 高度情報化社会における先端技術に対応しうる課題探求能力を身につけた独創的かつ創造的研究開発能力を有する人材
- (2) 自ら方向性を定め学習し問題を発見して解析する力と問題を解決し自ら設計して新しいものを生み出す力を備え、高度な技術力と豊かな教養力に裏打ちされた創造的技術者

4. 学習・教育目標

準学士課程及び専攻科課程で教育目的に沿った人材を育成するため、学生が身につける素養や成果を学習・教育目標として定めている。本校では技術者として将来に渡って身につけるべき能力として5つの主目標(A)～(E)を掲げている。これらの主目標をもとに、在学時に身につけるべき能力が(A1)～(E3)の11の項目に細分化されて、本科卒業または専攻科修了までに身に付けておくべき到達目標として規定されている。この11の到達目標は授業科目系統図を通じ個々の教科と対応している。学生は、シラバスやポートフォリオで成績を自己管理し、単位修得し学年進行を行うことで目標の達成度が確認できるようになっている。

・準学士課程

主目標(A)【愛の精神】：世界平和に貢献できる技術者に必要な豊かな教養、自ら考える力、いつくしみの心を身につける

到達目標(A1)：自ら考える力を身につける

到達目標(A2)：技術者としての倫理を身につける

主目標(B)【科学や工学の基礎】：科学の粋を極める技術者に必要な数学、自然科学、情報技術、専門工学の基礎を身につける

到達目標(B1)：数学、自然科学の力を身につける

到達目標(B2)：情報技術、専門工学の基礎を身につける

主目標(C)【コミュニケーション能力】：地域や国際舞台での活躍をめざして、多様な文化の理解とコミュニケーションできる力を身につける

到達目標(C1)：表現する力、ディスカッションする力を身につける

到達目標(C2)：英語を用いてコミュニケーションできる力を身につける

主目標(D)【技術者としてのセンス】：創造的技術者としてのセンスを磨き、探究心、分析力、イメージ力を身につける

到達目標(D1)：探求心、分析力、イメージ力、デザイン能力を身につける

到達目標(D2)：協力して問題を解決する力を身につける

・専攻科課程

主目標(A)【愛の精神】：世界平和に貢献できる技術者に必要な豊かな教養、自ら考える力、いつくしみの心を身につける

到達目標(A 1) : 自ら考える力を身につける

到達目標(A 2) : 技術者としての倫理を身につける

主目標(B) 【科学や工学の基礎】 : 科学の粋を極める技術者に必要な数学、自然科学、情報技術、専門工学の基礎を身につける

到達目標(B 1) : 数学、自然科学の力を身につける

到達目標(B 2) : 情報技術、専門工学の基礎を身につける

主目標(C) 【コミュニケーション能力】 : 地域や国際舞台での活躍をめざして、多様な文化の理解とコミュニケーションできる力を身につける

到達目標(C 1) : 表現する力、ディスカッションする力を身につける

到達目標(C 2) : 英語を用いてコミュニケーションできる力を身につける

主目標(D) 【技術者としてのセンス】 : 創造的技術者としてのセンスを磨き、探究心、分析力、イメージ力を身につける

到達目標(D 1) : 探求心、分析力、イメージ力、デザイン能力を身につける

到達目標(D 2) : 協力して問題を解決する力を身につける

主目標(E) 【専門工学の活用】 : 専門工学の知識を修得してその相互関連性を理解し、これを活用する力を身につける

到達目標(E 1) : 専門工学の知識を獲得する

到達目標(E 2) : 工学の相互関連性を理解する

到達目標(E 3) : 専門分野における研究開発の体験を通じて問題を発見し、解決する力を身につける